

『真空地帯』の語りの方 法 二重の語りに着目し て

著者	江畑 佐誉
雑誌名	日本文芸論叢
号	26
ページ	51-66
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129856

『真空地帯』の語りの方法

――二重の語りに着目して――

一、はじめに

野間宏『真空地帯』は、これまで〈『真空地帯』論争^①〉を嚆矢として、政治的・社会的文脈を引きずった議論の中に置かれてきた作品である。当初「真空ゾーン」の表題のもと一部が昭和二十六（一九五二）年の雑誌『人間』に掲載された後、昭和二十七年（一九五二）年二月に河出書房から書き下ろし長篇として刊行された本作は、日本の軍隊内部を正面から描いた作品として高い評価を受けるが、共産党員として活動していた野間宏の思想と、物語展開や作中人物とを結び付けて解釈し、作品の背後にある野間の思想を批判する論が続出した^②。

『真空地帯』は、戦争の記憶が未だ生々しい一九五二年という年代、そして共産党の分裂が文学界にも大きな影響が及んだ当時の世相に大きく引きずられる形で論じられ、その表現や記述を精査し詳細な検討を加えるということがこれまで重要視されてこな

江 畑 佐 誉

かったように思われる。本作はそれまでの初期短編に顕著に見られるような人間の意識の内奥にひたすら深く潜り込んでいく志向や異様に粘っこい独創的な文体からは距離を置き、作品を貫くストーリーと平易な文章による軍隊のリアルスティックな描写が導入されているが、その点については野間自身が、初の長編小説成立と、人間探求をいわゆる大衆層の読者と共有するという目的の下に意識的に取り入れたものだと言っている^③。作者の言説とは一定の距離を取る必要があるが、『真空地帯』の叙述の方法からは、それまでの叙述の方法を見直し長編小説としてまとめ上げた野間の文学的努力を窺い知ることができよう。

その一端を示す試みとして、本稿では『真空地帯』の語りの問題を取り上げる。右遠俊郎氏が指摘するように^④、『真空地帯』は非常に構成が明確な小説である。本作は全七章立ての三人称小説であるが、作品の中心人物である木谷と曾田という二者に寄り添っ

た語りがほぼ交互になされている。

木谷と曾田を視点人物とし、二者の視点を通して互いの存在や軍隊の姿を描きだしていることに關して、渡辺広士氏は、インテリ兵である曾田の視点が木谷の目を補い、全体的な状況把握を助けるために設定されたと述べ、また右遠氏は、『真空地帯』の作品世界を支える、内務班を中心とする軍隊の明部を描写する空間的な展開部分、木谷の事件をさかのぼることによって明らかになる軍隊の暗部を追及する時間的な展開の部分の二つの軸を結びつけるものとして木谷と曾田が登場し、二つの視点が設定されていると指摘している。これらの指摘は、本作の語りの構造と、作品の主軸や人物論との関わりを考える上で有効な見解であるが、本稿では詳細な記述にさらに踏み込み、木谷と曾田という二者を中心とした語りのそれぞれで語られていること（あるいは語られていないこと）を精査しその特質を検討することで、本作の語りの方法を見出し、それがどのように機能しているかを明らかにしたい。

二、語りの方法に導かれる読み

本節では、物語前半部の木谷と曾田それぞれに寄り添う語りについて検討し、その語りの方法を見出すこととする。

まず、木谷の視点を通して語りに着目する。木谷に寄り添う語りは、主に奇数章に配置されているが、曾田に寄り添う語りと比較して顕著であるのは、木谷の過去の事件の回想や語りに多く記述が割かれていることである。例えば、第三章前半部では、木谷の視点を通して、木谷の過去の事件の顛末を曾田に語る場面があ

り、木谷から曾田への発話の時点である現在と、語られる対象となる過去が並置されている。木谷の過去の事件をめぐる現在の語り出しの場面は以下の通りである。

「あの金子班長が俺を軍法会議にかけるのはかわいそうやいうので、そらえらい運動してくれよったんや……、俺のやったことくらいのこと軍法会議にかけるなんてことはいらんいうわけや……。そら曾田はん、うそやあらへんぜ……うそついたって、こらすぐあんたには、わかることやし、うそなど俺はいわへん……。〔中略〕曾田はん、うそやあらへん……。俺はさっきも金子班長に会いに炊事まで行ってきたとこや……。」木谷は林中尉の名をにくしくげにくりかえした。彼は曾田の顔をみているうちに、なかなか相手が自分のいうことをのみこんでくれないことにいらだった。彼は一体どう説明したらいいのかわからなかった。ただ林中尉といってみたって、あいつがこの俺にしたことがどんなことだということは少しもわかりはしないのだ……。それにこの曾田は、はたして俺のいうことを「ほんと」だと思っときいてくれるだろうか……。しかし、これが「ほんと」なんだ……〔第三章第五節、一四六頁〕

引用部では、「うそ」「ほんと」という言葉が多用され、木谷が曾田に対して語る内容の真実性が強調されている。この場面で見たいのは引用傍線部で示した部分である。この箇所ではそれ

まで使用されていた三人称の「彼」という主体から、一人称の「俺」に呼称が変化している。

ここで確認しておきたいのは、木谷と曾田の二者に寄り添う語りにおいて、木谷や曾田の主観・内面が語りや描写に反映されていることが顕著に分かる場合においても、本作では自由間接話法の形式を採らず、文章の主体を固有名詞や代名詞とし三人称の形式を保持する場合が多いという点である。

彼はしばらくしてもう群福が自分の後を追うてこないということに気づいたが、そのまま拍車を入れつつげんぐん速度をのぼして一周した。彼は自分の身体が快く伸びるのを感じた。ああ、彼の身体をつつむのは海の嵐だ……そして幼年時代が彼のうちのどこかで爆発しているかのようにだった。(第三章第四節、一三七頁)

引用部は第三章で木谷と曾田が馬運動をする場面であるが、引用二重傍線部では感嘆詞の「ああ」が使用され、木谷の内面や感覚に非常に接近していると考えられるにも拘わらず、呼称は「彼」で一貫している。このように、一人称に置き換えても成立するような文章は作中で散見されるものの、木谷や曾田の内面が自由間接話法の形式で語り出される場面は少ない。

それにも関わらず、前引用場面では例外的に自由間接話法の形式を採り、木谷の内面そのままを表現するかのようなあり方を見せている。それは完全に木谷に視点を託すことで、それ以降語ら

れることが、木谷にとっての真実であるということを提示する働きがあると考えられる。過去の事件の真相は、形式的には三人称の語りによって語られているが、その内容は物語上では木谷によって語られており、木谷の主観や認識を大いに含んだものであるということを示唆し強調しているのである。

例えば、第三章第六節の中間部の以下の箇所でもそのような語りのあり方を見ることができる。

もちろん木谷は林中尉の言葉にいろいろ抗弁したのである。しかし彼はそのためにかえって反軍思想の持主と判定されて重罪に処せられるにいったという。……

「一体、反軍思想などというものをこの俺がどこにもっていたか、また不穏な考え方などと検察官はいいやがるけど、……そんなことはみんな全くでたらめで勝手に向こうでつくったこしらえごとなんや。(中略)しかし兵隊はやな、いくら口ではそういうてても、この日本のくのためにつくす気持はみんな心の底にはもってるんや。」(木谷は話して行った。)ところがあの林中尉のやつはほんまにいんけんなやり方で事実をまげて、木谷を不利な立場においこみ、彼をおどしつけてことをはかろうとした。たしかに林中尉は木谷をおとし入れようとして事実をまげたのだ。(第三章第六節、一五九頁)

この場面では、「あの林中尉のやつ」「ほんまに」というように、木谷の話言葉のような表現が地の文で見られるのと対照的に、

括弧内において三人称の語りによる注釈が加えられている。ここでの地の文での語りは木谷の主観を反映したものであり、木谷を客観的に描写する三人称の語りは括弧内において副次的な立場に追い込まれている。

では、語り手による客観的な語りは、曾田に語る木谷の言葉をもどのようなものとして示しているだろうか。それは木谷の過去を語る第三章第六節の直前に、「彼の長い話は前後が入れちがい、その上当然うそも交っていたが、それは曾田の心をはげしくうった。」(一四七頁)と記述があるように、以降で語られる物語が「ほんとう」であるとする木谷の内心の主張に反して、完全な真実であることを否定する要素を孕んでいる。木谷の語りは、木谷自身が真実であると確信していることを背景にしているにも拘わらず、その全てを信頼することはできない要素が含まれていることがここに明らかにされているのである。第三章の現在の語りにおいて、語り手は木谷の内面との距離を縮め、時には完全に木谷に視点を託すことで、木谷にとっての「ほんとう」を語り出す。しかしその一方で、それが現在の木谷の主観や認識を反映し、「うそ」や「余計な説明」という真実から逸脱した部分を含むことを提示しているのである。木谷に寄り添う語りの第三章での方法をそこに認めることができる。

これまで、語りの方法によって読者に示される木谷の語りの不確実性について確認してきたが、作中人物である曾田も木谷が語る過去については懐疑を抱いており、曾田の語りの方法は、懐疑を深める曾田を映し出す一助となっていることが指摘できる。

曾田の視点を通した語りは主に偶数章に配置されており、渡辺広土氏が、「作者は木谷の目だけでは全体的な状況把握には足りないと感じ、それを補う目を曾田一等兵に設定した。」と指摘するように、語られる内容は木谷の語りと比較して非常に多岐にわたる、中でも曾田の知覚や認識を通して、木谷の姿を描写する場面が特に多く見られる。曾田は「反軍思想」を持つ大学出の兵隊として、陸軍刑務所にいた木谷に興味を抱き接近していくが、曾田の木谷への印象や判断は様々な情報によって揺れ動いている。曾田の語りにおいて木谷を描出していく上で、曾田は主に以下の情報によって木谷という人物の判断を試みる。

まずは、曾田が木谷と直接的に接した印象や、木谷が曾田に語った過去である。これらは木谷との交流を通して曾田に直接的に働きかけている。

曾田は相手のはげしさに圧倒された。そこに突き出た顔は、どこか別のところからでている顔だ……どこくらい深いところから。曾田は相手の手首のところに眼をやった。相手は笑った。曾田にはその笑いが理解できなかった。(第二章第九節、一〇三頁)

たしかに木谷が今日の午後した話は、曾田が木谷という男に全く期待することのなかったほど、こまかな観察と人間判断にとんだものであった。(中略)しかしながら木谷があまりにも軍法会議というものをばかにし、それが全く幼稚でたら

めなものだと強調したので、木谷のいうことにむしろ信用がおけなくなつたのだ。(第三章第一二節、二〇八―二〇九頁)

このような直接的な木谷の印象は、自らを判断基準にして木谷を判断したものであり、三人称の形式でありながらも曾田の内面に入り込みその視点を通して木谷を描出している。

また、事務室勤務である曾田がその権限を活用して見ることで、雑報や犯罪情報といった軍隊書類が挙げられる。以下は作中で曾田が木谷に関する軍隊書類を見る場面の一部である。

このような極悪不逞な兵の事例は、これまであつかった隊内犯罪者のうちでも非常にまれであつて、そのよつてくるところろは、国家観念が全く欠如しているところよりくるものと考えられる。(中略)――報告はこのようなものであつた。(第二章第六節、八三頁)

それは謄写版ずりの文書で、なかにペン書の紙がはさんであつたが、最初の部分には犯罪の事実がたどつてあつた。――(中略) しかも同様な上官に対する兵隊としてあるまじき言葉は、彼の所持せる私物の手帳のなかに、いたるところに発見され、木谷のいだいている考えが、まことに軍隊の神聖なる秩序を維持する上においてこの上なく有害であると認められるのであります。なおこの手帳は彼の胴巻より発見されたものであります。書類は大体このようなものであつたが、こ

こで切れてしまつてゐる。(第三章第一〇節、一一四頁)

「手帳の内容はきわめて陋劣であり、呪詛にみち、危険きわまらないものであります」と検察官は判定している。(第三章第一一節、二〇三頁)

引用部から読み取れるように、曾田が見た軍隊情報は、抜き出しや引用の形で地の文もしくは鍵括弧内に導入され、また地の文においては軍隊口調がそのまま保持されている。こういった引用の後に書類を見た曾田の所感が述べられはするものの、引用という曾田の主観の介在の余地を無くした語りの方法が、木谷の人物像を構成する上で軍隊側の視点を提示する一助になっていることが指摘できる。

また、曾田の主観を介在させない語りの方法としては、曾田が見聞きした他の兵隊や下士官、または木谷の兄という、木谷を取り巻く人物たちの木谷評も挙げられる。例えば、以下は曾田が公用で木谷の兄の家を訪れ対話する場面である。

しかしすぐにまたあれはもうとうの前から勝手に家を出て行つた子で、長い間何の行き来もなかつた、それにあれがわるいことをしたからというて、そのたびに一々よびだされていたんでは、かないまへんわというところにかえつて行く。

(第四章第二節、二二四頁)

「いくら言い置きしても、もう性根がわるいもんで、どうしようもない。」——「あれで、頭はわるい子やなかった……学校はようでけたけど、学校とこれとは別で、いくらでけたかて、性根がわるけりゃ、もう、なんにもええことが耳にはいらへんで、とうとうまがった道にはいつて行つて」——（後略）（第四章第二節、二三四頁）

木谷の兄は曾田に木谷によつて苦勞させられてきた過去や、現在の生活の厳しい状況などを語り聞かせるが、この場面では木谷兄の言説が直接話法もしくは関西の方言の口調をそのままに間接話法で語られる傾向にあり、木谷兄の人物像を立体的にし、語られている内容を印象深く訴えかける働きを持つと同時に、木谷兄から木谷への人物評価が曾田の内面を介することなく提示されていることが指摘できる。

以上確認したように、曾田の語りにおいて、木谷の姿は曾田という他者から描写され、また事務室勤務である曾田がその立場を利用して入手した木谷にまつわる軍隊書類の内容や他者の言説といった、木谷自身の語りとは別途に多様なことが語られている。それらは曾田が見聞きしたものでありつつ、曾田の主観を介在させない語りの方法が採られることによって、曾田の視点という一方向からのみでなく、多角的な方向から木谷像を提示することが可能になっていると言える。

しかし、曾田は木谷に関する様々な情報を得ながらも、木谷の実像を掴むのではなく木谷像に揺らぎを生じさせていることが指

摘できる。以下は、木谷の実際の印象と軍隊書類に記されたものとの差異や距離を測ろうとする曾田の内心の引用である。

曾田一等兵は先日よんだときよりもはるかにはげしい印象を、この報告からうけた。（中略）木谷のおどおどした動きのなかからは、どうしてもこのような強い感じがえられないということはこれが文章を誇張と考えている軍人の文章だからであらうが、それにしても、これではあまりにも、対象からけはなれてしまっているのだ。（第二章第六節、八四頁）

彼の心は陣営具倉庫にある犯罪情報の古い綴のことでいっぱいだった。彼は不思議にも眼の前にいる木谷の実在物よりも、このときには過去の木谷に心をうばわれていた。（第二章第一〇節、一二二頁）

その書類のかたっている木谷は、彼の予想を裏切つてただ遊興費につまつてその上で犯罪におちこんでいった一人の人間というにすぎなかった。しかし曾田の求めていたのは、そのような木谷ではなかったし、それでは木谷が彼に語ったところともひどくちがっているのである。もっとも曾田は、木谷が今日午後曾田にした話をすべてそのまま信じこんでしまっているというのではなかった。彼は木谷の話そのものにも疑問をいだかなければならなかった。（第三章第一二節、二〇八頁）

引用場面では、曾田が木谷の実際の印象と軍隊書類に記されたものとの差異や距離を測りながらも、自らが最も関心を持つ木谷の過去——木谷が思想犯であるか否かという問題を重視し、それを軍隊の犯罪情報綴に見出ししていることが指摘できる。

第三章前半で木谷によって過去が語られた後は、曾田は語られた内容を踏まえて木谷という人物に対して再検討を加えるが、曾田は木谷によって過去を語られ、また木谷に関する犯罪情報を全て入手しその全貌を明らかにした上でも、木谷に疑いを持ちその過去に囚われている。曾田は、自らが木谷と接触した印象や、木谷が語る彼の過去、また木谷に関する軍隊書類の情報を基に木谷という人物を探ろうとするが、それらが矛盾し齟齬が生じているために、統一的な木谷像を形成することができない。木谷にまつわる様々な情報は曾田が総合的な木谷の人物像を構築する上で必ずしも有効な材料となるのでなく、むしろそれらによって曾田の中での木谷像の乖離や分裂が生じてしまっていることが引用部から読み取れる。

曾田の語りにおける木谷を多角的に描くという語りの方法は、木谷の実像を捉えやすくする作用を持つのでなく、むしろ描かれたそれぞれの木谷像の差異や距離によってその実像を捉え難くすることで曾田の木谷への疑いを深めるのであり、またそうした曾田の姿を読者に提示しているのである。

これまで検討してきた木谷と曾田のそれぞれの語りが並置されることが齎す効果として、一つには、これまで先行研究に

おいて指摘されてきたように、語られる内容を相互に補完する働きがあると考えられる。一方の語りでは対象の内面、もう一方の語りでは他者から見た対象の外部が描写されることで、一つの視点に頼らない立体的な物語や作中人物の把握が可能になっており、特に曾田の語りにおける軍隊情報や、外出先での出来事は、木谷よりも軍隊内で自由の利く事務室勤務の曾田の視点だからこそ語られうることである。

一方で、木谷と曾田という二重の語りを通して、なお物語上において不透明なもの、明らかにされないものが残されていることも指摘できる。『真空地帯』は、基本的には物語が進んでいくに従って真実が徐々に明らかになっていく構成をとるが、語られたものによってむしろ新たな謎が生じたり、なお真相が掴みづらくなったりするというように真実から後退することがある。例えば、以下は第三章で曾田が木谷の過去を聞いた後、軍隊書類や語られた内容を反芻する場面の曾田の内面である。

たしかに第二の事件が明らかになってみれば、いまはもう木谷が反軍思想をもち、しかもその思想は相当はつきりした系統だったものだとは断定してさしつかえないのではないかと考えたが、しかし疑問は再び曾田の上をおおうのだ。——疑問はすぐさま起こる。(第三章第一一節、二〇三頁)

それゆえに彼はその話をきいているうちには、木谷のことをほとんどたがうということなく受け入れたのだ。しか

し曾田がよく考えてみると、その話にもやはり疑問は湧いた。いや疑問はいよいよ深まる一方だった。(第三章第一三節、二〇九頁)

先述したように、木谷の描かれ方は単に人間を内部と外部から描くという区分けに留まらず多様な方法が用いられており、木谷の存在は多角的・多重的に描かれている。それが木谷の人物像に揺らぎを齎し、先の引用のような曾田の「疑問」を生じさせている。木谷の語りが木谷の内面を反映し選択が加えられることで客観性を欠き、曾田の「疑問」に必ずしも照応しないために、曾田の「疑問」は全てが解消されることがないまま物語が進んでいく。ここで、不透明な特質を持つ木谷の語りと、木谷像の揺らぎを提示する曾田の語りの方法が互いに連関しながら、読者に曾田が抱く木谷への懷疑を共有させる読みの方向付けがなされていると考えられる。同時に、そうした疑いゆえに木谷への曾田の関心が深まること、そしてその背後に曾田自身の反軍的な思想が潜んでいることも明らかに示されている。

三、読みの方向の変化

前節において、第三章の木谷の過去の事件に関する語りの方法は、過去を語る場面で形式的には三人称を取りつつも、内容は木谷の主観や認識に大きく依存しているために不透明性を持つということを指摘した。しかし、第五章以降の物語後半部においては、先述したような語りの方法とは異なる語りの方法が見られる。

第五章は、第三章と同様に木谷の過去に関してまとまった記述が割かれ、第三章において曾田に語り切れなかった軍法会議にかけられた過去に焦点が当てられている。また、第三章では物語上における木谷から曾田への語りの方向が後景にあるのに対して、木谷が班内の兵隊から屈辱的な仕打ちを受けたことによる怒りに端を発して、同じく過去に受けた屈辱の経験として刑務所での理不尽な生活を想起するという流れにより、完全に木谷の回想によって成立している。特に第五章第三節から第五節までは、木谷の回想として、現在の時点から過去を想起していることが読み取れる表現が多く見られる。

たしかにそれは第三回目の取調べのときからだった。このことを忘れるなどということは木谷にはできないのである。軍法会議に対する彼の疑惑はこの日にはじまったのだし、いつもこの日の記憶から出発する。……(第五章第三節、二八三頁)

木谷の軍法会議に対する疑いはいまでも消えるべくもない。そして検察官に対する憎しみをどうして取り去ることができよう。……彼は全く衰弱した状態にあるとき、検察官から金入れを服の内ポケットから取ったことをみとめるように次第においつめられ、ついにそれをおしつけられてこばみきることができなかったのだ。それを思うといまも彼の体のうちにあららしく荒れまわるものがある。(第五章第五節、二九一―二九二頁)

節、二八三頁

木谷の回想は、先述したように木谷が班内の兵隊から屈辱的な仕打ちを受けたことによる怒りに端を発するものであるために、第五章第三節から第五節までの回想においては木谷の軍法会議への怒りや後悔といった感情が前面に押し出され、また作品内の現在で受けた仕打ちから想起した独居監での生活が焦点化されている。つまり、第三節から第五節においては、現在の木谷が受けた屈辱が、連鎖的に過去の監房での生活の記憶や怒りの感情を想起させ、それらが次々と語り出されていると言える。そのため、この箇所では厳密な時間の流れに沿った語りの方は取られず、時間意識に欠ける話題の転換や、情景豊かな回想の挿入が唐突になされるなど、木谷の心理と呼応した語りのあり方が見られる。

木谷の回想が導入される直前の第五章第二節末尾では、以下のような表現が見られる。

もしも彼が野戦行きのなかに加えられてしまったなら、彼が刑務所で考えていたことはすべてなにもかも消えてしまうのだ。もはや林中尉に会うことはできないし、花枝をつかまえることもできなくなる。それではすべておしまいだ。あの林中尉の野郎が軍法会議で一体どんなことをしたかを問いつめてやることは夢のようなことになってしまう。やつが検察官をうまくまるめこんで、どんなことをしやがったかを白状させてやることもできないし、あのいまいましい軍法会議のからくりをあばいてやることもできないのだ。(第五章第二

引用部分では、「あの林中尉の野郎」、「あのいまいましい軍法会議」という表現からも読み取れるように、語りが木谷の内面に非常に接近している。ここで語りと木谷との距離が縮み、以降において木谷の心理と呼応した回想の語りがなされることで、木谷というフィルターを介した過去の空間や人間関係の把握がより鮮明になっている。第五章での独居監での生活や衰弱の経過は木谷の内面に接近して語られているが、この部分は軍隊組織の中でも最も非人間的かつ抑圧的な陸軍刑務所の実態を徒刑者の内面に即して語ることと、その凄惨さをより読み手に訴えかけ強調する働きがあると思われる。

一方で、第五章第六節以降では、木谷の内面を介したフィルターの機能は希薄になっていくことが指摘できる。第六節からは岡本検察官との具体的な検察場面、公判に記述が割かれている。しかし、検察官との対話場面の描写は、第三章で多く見られる間接話法ではなく、直接話法での表現が多々見られ、地の文はそれまでと比較して少なくなる傾向が認められる。また、前述した時間意識の欠如や話題の転換といった、木谷の内面に呼応した語りの特徴も希薄化し、明確な時間の流れに沿って物語が展開されていく。以下の引用部では、第五章第六節以後において点線部のように時間の経過を指し示す部分を含む。

木谷の取調べは最初彼が刑務所にはいつて二日目に行われた。
(第五章第六節、二九五頁)

次回の取調べは三日後に行なわれたが、それはほとんど第一回の取調べの反復のようなものであり、検察官の調子もまた変わりがなかった。(第五章第六節、三〇一頁)

次回の取調べは二日後にあると言われていたが延期され、その間に木谷は雑居監から独居監へ移されていた。そして一週間後に彼が出廷したときには、検察官の態度は変わっていた。
(第五章第八節、三〇四頁―三〇五頁)

第六節以降で語られる内容を整理すると、第六節では木谷が刑務所に入って二日目に行なわれた最初の取調べ、第七節では前節から三日後(刑務所に入って五日後)の二回目の取調べ、第八節では独居房へと移された後(刑務所に入って七日目)の三回目の取調べ、第九節では木谷に思想犯の嫌疑がかかる四度目の取調べ、第十節では、前節から二度の取調べを経た後の公判の場面が描写される。

このように、第六節以降では時間という指標に忠実に過去が語られるとともに、直接話法の表現の多用によって情景の再現性が高く、また地の文においても客観的事実や当時の木谷の心境を語るなど、事件を経た現在の木谷の内面と語りとはある程度の距離を置かれていることが指摘できる。語り手が完全に独立して様々

な視点から過去を語るのでなく、一貫して木谷の側に立っていることは留意しなければならないが、第六節以降で語られる過去は、それまでの語りと比較して、木谷という存在を媒介にすることを極力回避しており、客観性に重きが置かれていると言える。

ここで木谷の過去が客観的に語られることには大きな意味がある。これまで読者は木谷の語りが不透明であることによって、木谷の過去と人物像に対して作中人物である曾田が持つ懐疑を共有して読む方向付けがなされていたが、第五章後半部にて焦点が当てられた木谷の回想が向かうのは、他ならぬ曾田の疑惑の核となる犯罪情報にであった木谷の取調べから有罪判決までの流れであり、それが現在の木谷の内面の介在を極力排して語られることで、読者は木谷の過去について具体的な理解と心象を形成することになる。

着目したいのは、この第五章の回想が、第三章と異なつて曾田には語られず読者にのみ提示されているということである。読者が第五章の木谷の語りによって木谷像を確立していくのと対照的に、曾田は第六章においても木谷への疑いを保持し、木谷の実像を捉えることのできない心情を次のように語り出している。

彼は木谷に深く同情はしていたが、むしろ木谷をおそれているではないか。いやいまもなお彼には木谷の正体をとらえるということができなかった。もちろん彼は、いまではこの木谷という男が自分と同じようにはっきりした反戦的な社会主義的な思想をもっているなどということは考えることができ

なくなっていたが、しかしやはりただ彼を窃盗犯として考えるなどということもできなかった。(第六章第一一節、三七〇頁)

このような、曾田が一貫して抱え続けている木谷への拭いきれない不審——それは前半部では木谷の語りの不確実性と相俟って読者が共有するものとしてあったが、作品後半部・第五章において木谷の過去が客観性の下に語り出されることをとおして、その曾田の疑いは実は空虚なもの、錯誤であることが明らかになる。言いかえれば、ここに至って読者と曾田との間には距離が生まれるのであり、空虚な疑いに左右される曾田の姿を対象化・相対化する読みの方向へと読者は導かれるのである。

四、語りの方法の機能

以上の本論では、物語の前半部において、木谷の語りの不確実性と曾田の語りにおける木谷像の揺らぎの提示によって、読者は基本的に曾田の感覚に同一化した形で木谷という人物を捉えるという読みの中にあるが、第五章に至って木谷の過去が客観的に描写されることで、曾田と読者との間に距離が生じ、木谷を疑う曾田を対象化する方向へと読者の読みが促されることを確認した。では、このような語りの方法による読みの方向性の変化は、物語展開とどのようにに関連するのだろうか。以下、第六章以降の物語展開を辿りながら検討していく。

第六章は曾田に寄り添った語りがなされ、安西二等兵の脱走疑

惑騒動と木谷の総パッチという二つの大きな事件を中心に、野戦行き人事の木谷への変更や染の営倉入りといった様々な出来事が展開する中で、曾田が自己発見と共に木谷に軍隊という「真空地帯」を破壊する可能性を見出す流れとなっている。

曾田は反軍思想を持つ兵隊であり、その思想は、大学出であるにも拘わらず幹部候補生にならず一等兵のままで留まっていることや、初年兵にパッチを加えないといった行動によって体现されている。しかし、こういった消極的な思想の表れ方は軍隊組織を破壊せしめるものではなく、また曾田自身もそうした思想を抱えながらも兵隊であるという自らの二重性に対する苦悩を抱えている。第六章までの曾田の基本的なあり方は、「真空地帯」を破壊する可能性を他者に見出し注意深く観察することで、自らの反軍思想の出口を探すというものであったが、曾田のあり方は、第六章において曾田が自己を見つめ直すことで大きな内的変化を迎える。

曾田に直接的に自己発見を促す契機となったのは、地野上等兵や今井上等兵に「監獄がえり」と揶揄され激怒した木谷が曾田を含む班内の全員にパッチを食らわせた班内総パッチである。曾田は他の兵隊と同じように殴られたことで、一律化された兵隊の価値観に無意識に侵されていたことを認識する。その内面の動きは、次のように語り出されている。

おお、たしかに曾田がおそれているのは刑務所ではないか……。(曾田は先ほど自分の頬に木谷の拳骨をうけたときのことを思いうかべたが)とすれば彼が木谷の拳骨をうける資格

をもたないなどとして考えることができようか。

たしかに「俺」はおおそれている、このことはうち消すことのできないことである。……そして「俺」は刑務所がえりの人間だというだけで、「あの木谷」をおおそれ、うたがいをもってみていたのだ。木谷は班のものと同じように「この俺」をならべてなぐりやがったが、どうして木谷が「この俺」をなぐったのかその理由はじつに明らかなことではないか。木谷がさっき班内のものをならべて総バッチをくらわせたという点から考えても、彼が思想をもっているなどということはもはや絶対に考えられないことである。しかしそれにもかかわらず「俺」が木谷になぐりたおされないですますなどということはできはしなかったのだ。たしかに「あの木谷」は「この俺」という人間を底の底まで見抜きやがったのだ。しかしそれも当然のことではないか。(中略) いや「俺」には木谷が「俺」の前にたつて、あの色の黒い顔をかたくして拳をふりあげたときなぜ木谷が「この俺」をなぐりやがるかということはずでにはつきりわかっていたのだ。なぜとってあの犯罪情報綴の記事が全くでたらめであるということは、隊長室で交していた金子軍曹と准尉の話を一寸きいただけでも明らかことといえるではないか。(中略) しかしなぜ「俺」はそのように「あの木谷」をおおそれなければならないのか。……その理由というのもまた「この俺」にはもはやじつに明らかなことではないか。

曾田は機関銃中隊横から酒保の方へ角をかえながら考えたが、彼はあの木谷の打った拳骨の打撃が自分の体をとらえて

いるものをこなごなに打ちくだくを感じた。木谷の手は真空地帯をうちこわす。(第六章第一四節、三九三頁～三九五頁)

引用傍線部に示したように、この場面で客観的な語り手は括弧内の副次的な立場に追いつ込まれ、語り手は徐々に曾田の内面に接近していく。そして「俺」という一人称による自由間接語法を用い、語りの速度と一体化した曾田の内面の動きを即時的に語り出していく。ここで曾田の意識は、「俺」、「この俺」や「あの木谷」という表現から読み取れるように、自己と木谷との距離を測り、自問を挟みながら二者の関係を掴もうとしていることが読み取れる。

この場面で、引用波線部に見られるように、曾田は自らが直接的に見聞きした情報に基づいて木谷という人物像を構築し、これまで抱えていた疑問を自問自答の形で解消していくあり方を見せる。班内の全員を並べてバッチを加えるという、軍隊での年次によって下位の者を従わせる典型的な軍隊教育を木谷が行ったことによって、曾田は木谷が反軍思想を持つ者ではないと断じるに至っているが、木谷が反軍思想を持つか否かという疑問は、それまで曾田を最も悩ませ木谷像の揺らぎを生じさせていたものである。また、曾田は木谷を野戦に追いやりとうとする上官たちの密談を耳にしたことで、木谷を取り巻く陰謀を認識し、木谷像の揺らぎを齎す大きな要因であった軍隊の犯罪情報綴の内容について「全くでたらめ」であると考えに至る。これらの情報は、第五章において木谷の過去が客観的に語られることで曾田の内省に先んじて読者には提示されており、それによって読者は第六章での曾田

の内省の内実を解しやすくなると思われる。

曾田の内面の動きにおいて着目したいのは、木谷が自分を殴るという行動を受けその心理を探る過程の中で、自らが木谷を他の者と同様に監獄がえりと見做し恐れていた、という心理を明らかにしていくことである。これまでの曾田の木谷への態度は、木谷を観察しその過去を様々な角度から照らし出した上で、「真空地帯」を破壊し内部に変化を齎すものとなる可能性を期待するというものであった。しかし、それは木谷と軍隊との対立を、曾田が二者から一定の距離を取って観察するというものであり、「木谷と自分とは同じ立場に立つことができると考えてもいた」（三八一頁）という曾田の自己認識とは乖離が生じている。しかし、金子軍曹と准尉の密談を聞いたことで木谷を取り巻く陰謀に直接的に関わりを持ち、またバッチの中で木谷が曾田を殴ることで、曾田は否応なく自己の第三者性を打ち壊され、「同じ立場に立つことができる」と考えてもいた」という認識の反証として木谷との心的距離を意識する。そして木谷の行動を経由して、他ならぬ「俺」自身を内省的に捉え直し、自己という存在のあり方そのものに直面するに至るのである。ここで曾田は無意識に軍隊論理に侵されていた自己を発見し、木谷の存在によって自己の抱える欺瞞や脆弱さが照らし出されている。

この曾田の自己発見の意味の大きさを強調するにあたって、これまで論じてきた語りの方法は有効に機能していると言える。先述したように、物語前半部では曾田の木谷への懷疑を読者に共有させるように読みが方向付けられていたが、物語後半部では曾田

と読者との距離が生じ読者に曾田を対象化させることで、曾田の抱える矛盾や内面の揺らぎが読者に鮮明な形で提示されている。第五章の語りは、右の引用部における曾田の認識を読者が納得と了解の下に受け止める上で、極めて効果的な機能を果たしているのである。

また、二者に寄り添った語りが交互になされるといって本作の語りは、単純に物語や作品人物を立体的に描くだけではなく、多様な語りのあり方が混在することによって不透明さを生み出すことになるが、むしろそういった不透明さがあることによって、それらが一気に解消される第六章以降の物語を動的に描き得ている。曾田と木谷の関係性においても同様に、前半部では木谷の過去とその実像を探ることに多くの記述を割き、木谷と曾田は互いに意識を向け交流を図りながらも、誤解や齟齬を抱え隔たりがあるという膠着状態を見せているが、木谷からのバッチを契機として曾田が木谷との関係を見つめ直し膠着状態が解消される中で、それ以降の物語展開に大きな変化を齎す曾田の自己発見の場面の重要性が際立つことになる。そして、それ以降曾田は自らに火の粉が降りかかる可能性を認識しながらも、木谷に野戦行き人事の変更を伝えることで、自己自身の意識から脱却する動きを見せる。このような反軍意識と兵隊であることの二重性に苦しむインテリ兵である曾田の自己覚醒の過程を、重要な意味を持つものとして強調することが、本作の二重の語りの目的の一端であったと考えられよう。『真空地帯』と題された小説は、木谷をめぐる物語でありながら、その周到な語りの方法をおして、曾田という存在自体

を照らし出しているのである。

五、おわりに

本稿では、これまで『真空地帯』の語りの方法を取り上げ精査してきた。物語前半部において木谷の語りで木谷の過去は不透明さを伴って語られており、また曾田の語りでは多様な語りのあり方が混在しそのために木谷像に揺らぎが生じていることで、読者は木谷に不審を抱く曾田の感覚に同一化した形で読みを進めていくが、物語後半部に至って木谷の過去が客観的に描写されることで、木谷を疑う曾田を対象化する方向へと読者の読みは促されている。そして読者に曾田を対象化させ、軍隊情報によって根付いた曾田の木谷への疑いを空虚化するよう読者の読みを導く語りの方法は、曾田の意識に軍隊というものが根差しているということを提示し、自己の抱える欺瞞や矛盾を照らし出された曾田の発見の意味の大きさを強調するものとして機能している。

このように、木谷という存在によって照らし出される曾田の意識は、本稿で取り上げた語りの方法以外にも見出すことができる。例えば、兵隊たちの身体描写は本作のリアリスティックな表現の一端としてその細部を彩る有効な役割を果たしており、作中人物の意識と連関しそれぞれの共通性や差異を取り出すことができる。その中でも、曾田の身体は曾田自身が意識化していない心理すらも如実に表すものとして、反軍思想を持ちつつも決定的に軍隊から逸脱することは避ける曾田の内面の揺らぎを度々描出し得ており、木谷の身体描写と比較してその差異を照らし出されている。

野間宏が周到に繰り返し描き出す二者の差異とその意識の変遷の重要さを示す一端として、今後はそのような作中の詳細な描写をさらに検討し、本稿で取り上げた語りの方法とも有機的に論じていく必要があるだろう。

『真空地帯』は、これまで作中人物や物語展開を中心に焦点が当てられ、そこに作者の過剰な態度を見出す流れの中で論じられてきた。しかし、作中の描写や記述の詳細な検討を加えることで、木谷と曾田、現在と過去、そして時間と空間という様々な軸が交錯し連関する本作の複雑な構造の中においても、読者の読みを導くための周到な方法が落とし込まれていることが分かる。そこに、『真空地帯』における野間宏の文学的努力の一端が示されていると言えるだろう。

注

- (1) 高い評価を得て世間における野間宏の作家的地位を確立させた本作であるが、刊行後半年を経過して『真空地帯』に対する厳しい批判論が相次いで発表され、野間宏の反批判を引き起こすに至った。佐々木基一氏が発表した作品中の「兵隊論」に対する否定論『真空地帯』について（一九五二年九月『文学』二〇巻九号）を嚆矢とし、同年十月には大西巨人氏が作品の軍隊観に対して厳しい批判論「俗情との結託」（一九五二年一〇月、『新日本文学』）を発表。十二月には窪川鶴次郎氏もこれに続いて『真空地帯』論（一九五二

年十二月、『潮』を発表した。これらのへ反『真空地帯』の論に対して、野間宏は「日本の軍隊について」（一九五三年九月、三一書房刊行『野間宏作品集』第一巻所収）で反批判を加える。また宮本顕治氏が『真空地帯』論について——組織と批評の問題から（二〇）（一九五四年四月、『新日本文学』）において大西論文への批判を展開すると、時を経て大西氏は『真空地帯』問題——会本来の使命発展のために・IV（一九五六年六月、『新日本文学』）で野間・宮本氏に反駁し、作品刊行時から四年以上もの間、『真空地帯』をめぐる論争が続いた。

(2) 一九五二年に刊行された本作は、発表されて即座にベストセラーとなり、同年の毎日出版文化賞を受賞した。多くの批評がなされ肯定的な見解が集まり、本多秋五氏は『物語戦後文学史』（一九六〇年十二月、新潮社）において、当時の『真空地帯』に関する状況について、戦後派作家の声明を揺るぎないものにした最初の作品であり、戦後派の仕事に懐疑的であった人々も本作には肯定的であったと述べ、本作の戦後文学史での位置づけについて論及している。猪野謙二氏は『真空地帯』（一九五二年六月、『近代文学』）で、読者の生理や心理の深層にある戦争の断片的な記憶を呼び起こす作者の執拗な表現力と、軍隊の構造を余すところなく暴露していくという主題を賛辞している。

(3) 一九四六年に日本共産党に入党した野間宏は、一九四八年十一月以降地域人民闘争に傾倒し、新日本文学会内の対立

を受けて一九五〇年に発足した文芸雑誌『人民文学』に携わった。地域人民闘争との関わりは、野間の活動において実践的な社会的運動への参加の欠如から一歩抜け出すものとして捉えられ、このような野間宏の実生活における思想上の変化を、『真空地帯』の作中人物の思想や物語展開と結び付けて論じる先行論が続出した。佐々木基一氏は『真空地帯』について（一九五二年九月『文学』二〇巻九号）で、曾田の軍隊観や木谷に「真空地帯をうちこわす」エネルギーを発見するのは、当時野間が属していた『人民文学』に顕著なインテリ蔑視、大衆追随主義に他ならないという見解を述べ批判した。また兵藤正之助氏はその著書『野間宏論』（一九七一年七月、新潮社、一一九頁～一三九頁）にて、当時の野間宏の言説を引きながら曾田の木谷への期待に当時の野間の人民闘争への傾斜を指摘し、右遠俊郎氏は『真空地帯』論（一九六六年五月、『日本近代文学』第四巻）で、作者の階級的な現実把握の視点を人民との連帯、実践によって確立しようという決意が試行的な文学的実践として本作を生成したと述べている。

(4) 野間宏「私の小説観——『暗い絵』から『真空地帯』への創作意図」（一九五四年二月、『文章倶楽部』）

(5) 右遠俊郎『『真空地帯』論』（一九六六年五月、『日本近代文学』第四号）

(6) 渡辺広士著『野間宏論』（一九六九年十月、審美社）一五四頁
(7) 同注5

(8) 同注6

※本文の引用は、『野間宏作品集』第二卷（岩波書店、一九八八年二月八日）に拠り、引用に際しては、引用した本文の末尾括弧内に章節及び頁数を漢数字で示した。なお、引用に際しルビや記号の省略等、適宜表記を改めた箇所がある。また、引用文中における傍線・記号・注などは、特に断りのない限り引用者が付したものである。

（平成二十七年東北大学文学部卒業）